

CONTENTS

1. 学会開催行事等の紹介

- 年次大会
- 認定講習
- シンポジウム
- お茶の水コラボレーションセミナー

2. 企画連載: 優れた産学官連携事例紹介

- 省エネ下水処理システム～高知から全国へ
- 前澤工業株式会社 中町和雄 氏

3. トピック

- (1) URA に関する取り組みについて
- URA 対話集会、URA シンポジウムへの参画 -
- (2) 産学連携学会 平成26年度秋季シンポジウムの報告
- 「超高齢化社会での事業創造
- ～高齢者の QOL 向上を目指したイノベーション～」

4. 会告 諸報・ご案内

- ◆学産連携システム研究会・公開シンポジウムを開催しました
- ◆アグリビジネス創出フェア 2014 に出展しました
- ◆産業交流展 2014 に出展しました
- ◆第6回研究・事例発表会を開催します(関西・中四国支部)(12/5 開催)
- ◆第 11 回お茶ノ水コラボレーションセミナーを開催します(12/10 開催)
- ◆産学連携学会第 13 回大会を開催します(6/25、26 開催)

5. 広報委員会からのおしらせ/編集後記

プロメテウスの火  
人類は火とそして知恵を授かり、  
しかし未来を知る能力を失った。  
代わりに得たのは、希望であった。  
今、私たちは破壊と創造の火を燃やす。

■ 年次大会

産学連携学会では年1回の年次大会を開催しています。産学連携学会が設立された平成15年に、北海道大学を会場に第1回大会が開催されました。

年次大会には、各地の産学官連携担当従事者をはじめとし、産業界や官(国・自治体)の立場の方など約300人が参加します。幅広い産学官連携活動が繰り広げられる中、各々の産学官連携に関する事例紹介や共同研究、知的財産や技術移転に関する解析調査、など、広範囲におよぶ発表・議論が行われています。最近では、産学官連携により取り込まれる、地域の人材育成や、文化・教育活動への貢献、地域ブランド形成に向けた地場産品の商品化・事業化への取り組み事例などについても数多く発表されています。産学官連携活動を推進する関係者にとって全国の様々な取り組みや考え方を知る機会となることから、各々の活動拠点での取り組みへ反映できるヒントを得るための情報交換の場として、大変に有効な大会となっています。

また、年次大会は開催地での産学官連携活動の啓発にも威力を発揮しており、多くの地元関係者が自らの取り組みについて紹介・議論するなど、地域における課題解決やネットワーク強化にも繋がっています。

今回の第13回大会は平成27年の6月に北海道北見市で開催されます。詳細については、後日、学会のホームページや本ニュースレターなどで会員のみなさまにご案内いたします。ぜひ、多くの皆様に広く年次大会を活用いただき、産学官連携活動へと活かしていただければと思います。ご参加をお待ちしております。

これまで開催している産学連携学会年次大会

年次大会	開催地(当番校)	開催日
第1回	北海道札幌市 (北海道大学)	2003年9月15-16日
第2回	福岡県福岡市 (九州大学)	2004年6月11-12日
第3回	徳島県徳島市 (徳島大学)	2005年5月26-27日
第4回	東京都江戸川区 (群馬大学)	2006年6月15-16日
第5回	山形県米沢市 (山形大学)	2007年6月28-29日
第6回	大分県大分市 (大分大学)	2008年6月26-27日
第7回	福井県福井市 (福井大学)	2009年8月17-18日
第8回	北海道函館市 (はこだて未来大学)	2010年6月24-25日
第9回	佐賀県佐賀市 (佐賀大学)	2011年6月16-17日
第10回	高知県高知市 (高知大学)	2012年6月14-15日
第11回	岩手県盛岡市 (岩手大学)	2013年6月20-21日
第12回	長野県諏訪郡 (信州大学)	2014年6月25-27日
第13回 (予定)	北海道北見市 (北見工業大学)	2015年6月25-26日 詳細は後日案内

(広報委員会・内島典子)

## ■ 認定講習

産学連携学会では、都内で、年3回程度、有料の認定講習会を開催しています。これは2007年から開催されており、既に20回以上の開催に及んでいます。この講習会の特徴としては以下に述べるようなことがあげられます。

### ①実践的（実用的）であること。

講座の内容は中小企業対象の産学官連携において実務的意義のある（言い方を変えれば過去の産学官連携の事例に基づいた）内容であることを心がけています。比較的規模の大きい企業と大学の産学連携は、大学の研究領域に近いところで共同研究等のプロジェクトがなされ、プロジェクトスキープの共有化も容易です。しかしながら中小企業対象の場合、連携の構造はより複雑さを増しており、単純に”企業”と”大学”の出会いの機会が増えれば、その連携の実績が増えるというものではありません。そこには様々な制約条件があり、その理解がなければ“産学連携”をおこなうことは極めて困難であり、仮にそうした問題を無視して連携しても、双方が好む結果を得る可能性は極めて低いものになります。こうした観点での実践的な講座という意味では日本で唯一のものであるという自負が私たちにはあります。

②講座を聴講した内容に関連したテーマでレポート作成していただき、その内容で受講生のリテラシーレベルを明確化すること。

通常のこの種の講座では、一方通行で座学を聞くだけのようなケースが非常に多いのですが、産学連携学会では、受講者にレポートを書いていただく事によってその能力を“認定”させていただいております。また、私たちは、レポートを書いていただくプロセスそのものも、産学官連携への理解を深めるものとして、重要視しています。

③受講者同士のコミュニケーションをおこなう場面を設け、そのネットワーク構築に寄与すること。

本講習会では、受講生同士が特定のテーマで討議する機会を設け、さらに懇親会等の機会を設けています。また、講師との質疑応答の機会をたくさん設ける事も意識してプログラムの設計をしています。

また、認定講習会を受講いただいた方を対象として、受講後約半年後に、フォローアップの研修機会を設けています。その中で実際の産学官連携活動における日常的な課題等にお応えするような事にも取り組んでおります。今まで、この講習会には大学関係者だけでなく、行政や金融機関、あるいは

企業で研究開発に関わるお仕事をされておられる方等、多岐に渡った御参加をいただいております。もし産学官連携の実務的な課題をお持ちの方がおられたら是非、本講習会を受講されることをお勧めいたします。



認定講習会の風景

(会長/広報委員会・伊藤正実)

## ■ シンポジウム

学会主催のシンポジウムは、2004年度（平成16年度）から、毎年度ほぼ1回の頻度で開催してきています。シンポジウムの名称は変遷してきていますが、ここ数年は秋季シンポジウムまたはシンポジウムとなっています。テーマとしては、時宜を得たものを選定してきましたが、最近では、企業も強い関心を寄せるとされる最新トピックスを取り上げるようになっています。表1.に今までの開催実績を示します。プログラムは、概ね、第一部基調講演・事例講演、第二部パネル討論で構成することが多いです。シンポジウム終了後は、通常、意見交換会を開催し、意見交換・情報交換を行っています。

表 1. 産学連携学会主催のシンポジウムの実績

No	名称 開催日 開催場所	テーマ (参加人数)
1	秋季学術シンポジウム 2004. 11. 19(金) 多摩大学ルネッサンスセンター ー (品川)	産学連携学確立の道筋 (64名)
2	第2回学術シンポジウム 2005. 10. 6(木) 学術総合センター	記載無し (93名)
3	産学連携学会主催の第5回産 学官連携推進会議 ワークシ ョップ3 2006. 6. 10(土) 京都国際会議場	地域産学官連携の最前線か ら (一)
4	平成 20 年度秋季シンポジウ ム 2008. 11. 19(水) 工学院大学新宿キャンパス	大学における産学連携の最 前線 (96名)
5	平成 21 年度秋季シンポジウ ム 2009. 11. 30(月) 川崎市産業振興会館	産学連携の最前線～中小企 業の産学連携はどのように したらうまくいくかを探る (77名)
6	平成 22 年度秋季シンポジウ ム 2010. 11. 27(土) 早稲田大学理工学部	設立 10 年を前に産学連携学 を考える (56名)
7	平成 23 年度シンポジウム 2012. 2. 14(火) 学術総合センター	オープンイノベーション ～自前主義から連携重視へ (158名)
8	平成 24 年度秋季シンポジウ ム 2012. 12. 4(火) 野村證券株式会社 大手町本社ビル	産業振興へのあらたな挑戦 ～地域密着型金融のパラダ イムシフト～ (148名)
9	平成 25 年度シンポジウム 2014. 1. 9(木) 芝浦工業大学芝浦キャンパス	「ライフイノベーション実 現に向けての産学連携～他 の製造業からの新規参入 ～」(137名)
10	平成 26 年度秋季シンポジウ ム 2014. 11. 14(金) 芝浦工業大学芝浦キャンパス	超高齢社会での事業創造 ～高齢者のQOL向上を目 指したイノベーション～ (79名)



講演の風景



パネル討論の風景

(事業委員会・桑江良昇)

### ■ お茶の水コラボレーションセミナー

産学連携学会では、産学連携に係わる仕事に従事する人たちのコミュニティの場を提供するため、年次大会、シンポジウムを開催しておりますが、いずれも1回/年のため、当日の都合がつかないと参加できないこととなります。一方、産学連携で重要なことの一つとして、過去の成功事例を聞いて参考とすることがあると思いますが、実際に体験談を聞くことが一番の近道だと考えられます。そこで、多くの人に参加機会が持てるようなセミナーの企画を考えました。開催するに当たっては、以下の点に留意をしました。

- ①開催日時の固定化
- ②ある程度の開催今度
- ③交通至便の会場（遠方からの参加が可能ないように東京駅から10分程度）
- ④廉価な会場費（参加費が無料で学会に負担がかからない）
- ⑤セミナー終了後に交流会が開催可能

この結果、開催日・開催頻度は隔月（一部変則）の第2水曜日午後6時半～8時、会場は東京医科歯科大学（大学のご厚意により無料）となりました。双方向のセミナーとするため、講演時間1時間、質疑応答30分、セミナー終了後に交流会1時間としました。講演テーマは、会場の関係でライフサイエンスが多くなってはおりますが、限定してはおりません。講師もいろいろな企業の方を選定しています。各回の参加者は30名前後です。（これまでの開催実績については、表2.を参照のこと）

次回第11回は、12月10日に東レ株式会社の成戸氏をお招

きして「異業種東レの医薬・医療開発」と題して開催予定です。これまでの参加者アンケートの結果を参考に午後5時から開始する予定です。是非、みなさまのご参加をお待ちしております。



コラボレーションセミナーの風景

表2.お茶の水コラボレーションセミナー開催実績について

開催日	講演テーマ 講師名(所属)	人数
第1回 2013 4/10	「 <u>オリンパス(株)の医療分野の研究開発と、産学連携の取り組み</u> 」 堀井 章弘(オリンパス(株)研究開発センター／医療探索部 部長)	39
第2回 2013 5/8	「 <u>IMECのビジネスモデルから探る、産学連携の将来像</u> 」 久保田 大志(IMECオフィスジャパン／セールスマネージャ)	49
第3回 2013 7/10	「 <u>富士フィルムの医療機器・医療IT開発における産学連携の取り組み</u> 」 名波 昌治(富士フィルム(株)／ヘルスケア事業推進室 医療行政グループ兼メディカルシステム事業部 医療政策グループ マネージャー)	33

第4回 2013 9/11	「 <u>シズベルの知財活動と日本の知財状況</u> 」 尾形 偉幸(シズベルジャパン(株)／代表取締役)	23
第5回 2013 11/13	「 <u>ボディエリアネットワーク(BAN)技術に対する富士通の取り組み</u> 」 高木 淳一(富士通(株)／イノベーションソリューション事業本部 ソーシャルクラウドサービス統括部 マネージャー)	18
第6回 2014 2/12	「 <u>本音で語る・介護事業者の課題とニーズ</u> 」 高橋 行憲((株)ウイズネット／代表取締役社長)	33
第7回 2014 4/9	「 <u>ポケットガイガー開発物語～1人で始め、企業や自治体、大学、そして世界を巻き込んだプロジェクトへ～</u> 」 石垣 陽(ヤグチ電子工業(株)／取締役)	28
第8回 2014 5/14	「 <u>レキットベンキーマーの研究開発戦略と技術ニーズ～オープンイノベーションによる製品開発～</u> 」 西村 文晶 (レキットベンキーマー・アジアパシフィック・リミテッド／アウトサイドイノベーション アソシエイト)	31
第9回 2014 7/9	「 <u>粘着剤等ケミカルズ領域における産学連携での新規事業開発とアジア市場展開戦略</u> 」 中島 幹(綜研化学(株)／取締役会長)	31
第10回 2014 9/10	「 <u>デザイン心理学に基づく Evidence-based Design</u> 」 日比野 好恵((株)BB STONE デザイン心理学研究所／代表取締役社長) 「 <u>臨床サンプルを用いた創薬研究の解析プラットフォーム</u> 」 板東 泰彦((株)バイオシス・テクノロジーズ／代表取締役) 「 <u>海水養魚の歴史と展望</u> 」 宮下 盛((株)アーマリン近大／取締役)	70

(事業委員会・菊地博道)

## ■ 企画連載:優れた産学官連携事例の紹介

### 省エネ下水処理システム～高知から全国へ

前澤工業株式会社

中町和雄

#### はじめに

前澤工業株式会社は、埼玉県川口市に本社をおく創業昭和12年の総合水処理メーカーであり、国内外の浄水場や下水処理場のプラント建設などを行っている。特に、下水処理方式の一つで、地方都市に多い「オキシデーションディッチ法(以下OD法)」については、昭和61年に1号機を納入して以来、全国に100カ所以上の実績を有している。

高知大学農学部の藤原准教授(現教授)は、OD法の効率化・省エネ化を目指し平成12年度から「高負荷二点DO制御ODシステム」の開発に着手された。二点DO制御システムとはセンサーを用いた自動制御により、従来よりコンパクトな処理槽で高度な処理を可能とする技術である。平成26年7月、日本下水道事業団による新技術I類の選定を受け、高知発の省エネ下水処理システムが全国へと本格的に普及することが期待されている。そこで、この10年以上にわたる技術開発の歩みを産学官連携の視点から改めて振り返ってみたいと思う。

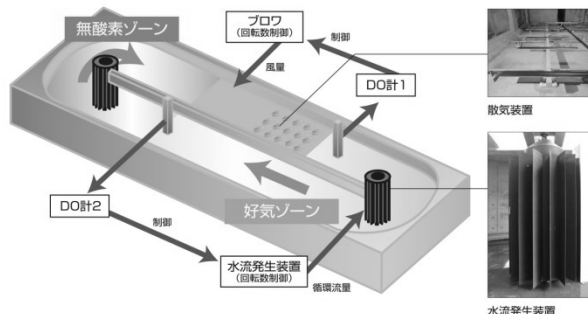


図 二点DO制御システムの概略図

#### 研究から開発へ

「高負荷二点DO制御OD法」は、藤原教授が京都大学在学中の自身の研究成果から着想を得たもので、平成12年度から実験室で人口下水を用いた実験を開始された。このラボ実験の段階で、この段階から前澤工業も研究グループに加わり後方支援を開始した。

下水処理の研究で最初に直面する課題は、実下水の確保である。実下水中には多種多様の有機物・無機物が含まれているため、実験の進展には下水処理場でのフィールド実験がかかせない。

そこで、高知大学では平成16年度から高知県土木部、高知県下水道公社から実下水と実験場所の提供を受けて、浦戸湾東部流域高須浄化センター内に小型プラント(処理能力600L/日)を設置し、実下水を用いた連続実験を開始した。

このように、技術自体の先進性・革新性はもとより、大学側の日頃の地域連携の努力、自治体側の政策課題への取り組み・理解などが結実したことにより、研究から開発のステージへと進めることができたように思う。

#### 開発から事業化へ

小型プラント実験では、実下水においても従来ODの約半分の処理時間で高効率に処理が可能であるという実験データが得られた。

この段階での課題は、スケールアップのための装置開発とそれによる実証実験の実施であった。実処理場の規模は実験プラントの100倍以上となるため、スケールアップ実験が求められるが、実証実験には現に稼働中の処理設備を使用する必要のあることから、事業化のめどはたたなかった。

これに対し、高知大学では実験成果を論文および発表により広く公開するとともに、定期的に高知県への報告会を開催した。また、前澤工業では二点DO制御を実現化するために、一部オランダからの技術導入も含めて装置開発に着手した。一方、高知県土木部公園下水道課では、本技術が県内の下水道普及と効率化に寄与するとの考えのもとに、フィールド提供可能な県内自治体の斡旋を行われた。

このような関係者の努力の結果、平成20年度から高知県香南市の野市浄化センターにおいて日本下水道事業団を含めた関係団体による実証研究(処理能力3,500m<sup>3</sup>/日)が開始された。

本実証研究は当初の成果を上げ、平成23年に高知県庁において連名での成果記者発表(高知大学、高知県、香南市、日本下水道事業団、前澤工業)を行っている。また、実証設備は研究終了後も実施設として順調に稼働中である。

#### おわりに

本技術は平成26年7月に日本下水道事業団から、全国展開可能な技術「新技術I類」として選定を受けており、今後高知発の省エネ下水処理システムが全国へと本格的に普及することが期待されている。

本技術の事業化は、十数年にわたる年月と非常に多くの関係者の方々のご尽力の成果であると考えている。紙面の関係で名前を挙げて感謝を申し上げることはできないが、この場を借りて謝意を表したいと思う。

## ◇ トピック(1) ◇

### ◆URAに関する取り組みについて —URA対話集会、URAシンポジウムへの参画—

近年、大学等における研究者の研究活動活性化や環境整備、研究開発マネジメント強化に向けた研究マネジメント人材として、リサーチ・アドミニストレーター (University Research Administrator : URA) の配置が進んでいる。日本の URA 業務は、米国などで配置されている RA のような明確な立場と役割を担う場合は少なく、機関の規模や構成、配置によりその業務も広範かつ多種多様に及ぶ。そのため、研究資金の調達や管理、産業界や地域社会との連携や共同研究、知財の管理や技術移転活動等のマネジメントなど、既存の研究支援人材との協業や役割分担について、多くの議論がなされている。

本産学連携学会は、広義の“産学連携”に係る学問を議論する場として位置付けており、URA という肩書を持ち、所謂“産学連携”の実務を担う人材の参画が増えている。

そこで、まず産学連携学会第12回大会において「URA 対話集会～URA の現状と課題～」と題して、産学連携に係る URA や関係者らの現場レベルでの現状と課題を共有し、今後の業務の参考にするを目的とした対話の場を設けた。プログラムは以下の通りであり、62名（うち URA という肩書 22名）の参加を得て、盛況であった。

#### 産学連携学会第12回大会

##### 「URA 対話集会～URA の現状と課題～」

平成 26 年 6 月 26 日 (木) 10:00～16:00 (下諏訪商工会議所)

司会：本会会長 伊藤 正実 (群馬大学)

趣旨説明：本会副会長 桑江 良昇 (宇都宮大学)

杉原 伸宏 (信州大学) 「URA に関する現状報告」

原田 隆 (福井大学) 「URA のキャリア形成に関する対話」

馬場 大輔 (岐阜大学) 「URA が産学連携に与える効果に関する対話」



また、全国の実務者が中心に集まり、URA の活動の成果や今後の URA のあり方について情報交換、ディスカッションする場となっている URA シンポジウム (RA 研究会同時開催) に、今年度初めて学会として URA シンポジウムセッションという枠組みに参画した。本シンポジウムは、文部科学省「URA を育成・確保するシステムの整備事業」を軸として、現在の「研究大学強化促進事業」まで、平成 23 年度から各大学や研究機関に設置が促進されてきた URA の全国大会であり、今年度で、第 4 回目の開催 (RA 研究会としては先行開催していたため第 6 回目) となる。セッションでは、「URA 制度導入による産学官連携の新たな展開」と題して、研究力を強化し、本質的なイノベーションにつなげようというミッションを持たされた大学において、産学官連携を担う URA として、過去の経験を生かして、日本の産学官連携の質に変容を与える存在となり得るかを議論した。プログラムは以下の通りであり、約 70 名程度の参加を得た。

#### 第4回 URA シンポジウム/第6回 RA 研究会

##### URA シンポジウムセッション「URA 制度導入による産学官連携の新たな展開」

平成 26 年 9 月 18 日 (木) 12:45～14:15 (北海道大学)

セッションオーガナイザー：伊藤 正実 (群馬大学)

桑江 良昇 (宇都宮大学)

司会者：伊藤 正実 (群馬大学)

パネラー：柿田 佳子 (エルゼビア・ジャパン株式会社)

石塚 悟史 (高知大学)

杉原 伸宏 (信州大学)

原田 隆 (東京工業大学)

本産学連携学会は、今年度で発足 12 年を数え、産学連携という切り口で多くの実績を有している上に、徐々にではあるが実務を担う人材の世代交代も進みつつあり、新たな産学連携の風が吹きつつある。一方 URA については、日本への導入の歴史は浅いものの、前述の通り今後益々その設置が全国に広がる事が予測され、活躍の場も広域に及ぶであろう。本学会では、特に本学会会員の若手層および URA が抱える悩みや課題を共有し、共に歩む新たな研究支援人材群として、その場の創出を検討していく。

(広報委員会)

## ◇ トピック(2) ◇

### ◆産学連携学会 平成26年度秋季シンポジウムの報告

#### 「超高齢化社会での事業創造

#### ～高齢者のQOL向上を目指したイノベーション～」

産学連携学会 副会長  
宇都宮大学 地域共生研究開発センター  
客員教授 桑江 良昇

産学連携学会平成26年度秋季シンポジウムが11月14日(金)午後、東京都内の芝浦工業大学芝浦キャンパスで開催された。本シンポジウムの目的は、産学連携を活用して、高齢者市場で事業を創造した企業に事例を報告していただき、事業創造の条件・ノウハウ・課題等を探っていくことであった。参加者は79名で、プログラムは以下の通りであった。

総合司会：本会副会長 桑江 良昇(宇都宮大学)  
主催者挨拶：本会会長 伊藤 正実(群馬大学)  
趣旨説明：本会理事 林 聖子(日本立地センター)  
基調報告：『高齢者市場の現状と展望』

(株)ニッセイ基礎研究所生活研究部 主任研究員 前田 展弘氏  
講演1：『産学連携で医療機器開発』

ナカシマメディカル(株) 代表取締役社長 中島 義雄氏  
講演2：『拡大する「医療・介護」マーケットに欠かせないコーディネーター、そしてビジネス・ファインダー—元大学教員、そして起業家としての視点—』

(株)バリオン介護環境研究所 代表取締役 金沢 善智氏  
講演3：『孝行デマンドバスとメディカルフィットネスで国民の健康寿命を延伸させたい』

コガソフトウェア(株) 代表取締役 古賀 詳二氏  
パネル討論：『事業創造の条件・ノウハウ・課題』

- ・パネリスト：中島 義雄氏、金沢 善智氏、古賀 詳二氏(以上、前掲)
- ・コメンテータ：前田 展弘氏(前掲)
- ・モデレータ：伊藤 正実(前掲)

閉会挨拶：本会副会長 川崎 一正(新潟大学)



主催者挨拶では、本会伊藤会長から、本学会は異なるセクター間で連携して、知的生産・価値創造を目指す学会であるが、少子高齢社会において連携により補うことが益々重要になることが述べられた。趣旨説明では、本会林理事から、本シンポジウムの目的は、産学連携を活用して、高齢者市場で事業を創造した企業に事例を報告していただき、事業創造の条件・ノウハウ・課題等を探っていくことであることが述べられた。基調報告では、ニッセイ基礎研究所の前田氏から、超高齢社会について、社会、個人および汗場の視点からとらえた報告がなされた。講演(事例紹介)では、企業経営者であるナカシマメディカル(株) 中島氏、(株)バリオン介護環境研究所 金沢氏、コガソフトウェア(株) 古賀氏から、高齢者市場での事業創造の動機と経緯、その事業・製品を選択した理由、事業創造の障壁とその克服、産学連携の役割、現在の課題と今後の展望等について紹介がなされた。これらの講演では、高齢者市場での事業創造においても、産学連携が有効であることが示された。パネル討論では、パネリストとして基調報告していただいた3名の講演者(中島氏、金沢氏、および古賀氏)、コメンテータとして基調報告をされた前田氏に務めていただき、伊藤会長による進行のもと、会場からの質疑(事業資金の調達、現場からのニーズに対する目利き、海外による模倣品、等)にも答えつつ、熱心な議論が展開された。

以上、講演とパネル討論から、今回のシンポジウムの目的は十分達成できたと考えられる。シンポジウム終了後の意見交換会(27名参加)では、シンポジウムの延長線上での意見交換や交流が続いた。アンケートでは48名の方から回答をいただいた。その結果の一部を下図に示す。理解し易さと参考度の両方において、肯定的な回答をいただいた。また、シンポジウムテーマや学会活動に関わる多くの有用なご意見があり、今後の活動に反映していきたい。

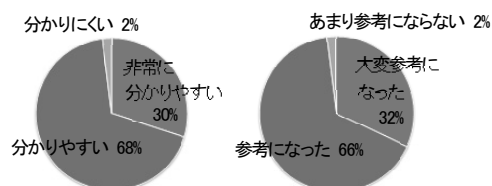


図1 理解しやすかったか

図2 参考になったか

(事業委員会)



## 会告

### □ 諸報 □

多くの皆様のご参加・ご来場ありがとうございました。

#### ◆学金連携システム研究会・公開シンポジウムを開催しました

- 日時 2014年9月19日(金) 14:30~17:00
- 場所 岡山大学津島キャンパス 大学会館の第三会議室  
(キャンパスマップのE2 1階)  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

#### ◆アグリビジネス創出フェア2014に出展しました

- 日時 2014年11月12日(水)~14日(金)、3日間
- 場所 東京ビックサイト 西4ホール  
(〒135-0063 東京都江東区有明3-11-1)

#### ◆産業交流展2014に出展しました

- 日時 2014年11月19日(水)~21日(金)、3日間
- 場所 東京ビックサイト 東5・6ホール  
(〒135-0063 東京都江東区有明3-11-1)

### □ ご案内 □

#### ◆第6回研究・事例発表会を開催(関西・中四国支部)

##### 【開催内容】

##### 1. 発表会

- 日時 2014年12月5日(金) 11:00~17:50
- 場所 愛媛大学 城北地区キャンパス メディアホール  
(総合情報メディアセンター 1階)  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番

##### 2. 情報交換会

- 日時 2014年12月5日(金) 18:00~19:30
- 場所 カフェレストラン「セ・トリアン」  
(愛媛大学城北地区キャンパス内)  
〒790-8577 愛媛県松山市文京町3番
- 主催 特定非営利活動法人 産学連携学会 関西・中四国支部
- URL  
<http://www.sgrk.shimane-u.ac.jp/j-sip-B150/meeting/6th-2014/>

#### ◆第11回 お茶の水コラボレーションセミナーを開催

##### 【開催内容】

- 日時 2014年12月10日(水) 17:00~18:30
- 場所 東京医科歯科大学 M&Dタワー2階 共用講義室2  
〒113-8510 東京都文京区湯島1-5-15  
(最寄駅: JR 御茶ノ水駅から徒歩5分)
- 講演者 東レ株式会社  
顧問(前常務理事、医薬・医療信頼性保証室長)  
成戸 昌信 氏
- 講演テーマ 『異業種東レの医薬・医療開発—ユニークな製品をつくれた背景:組織と仕組み、オープンイノベーション—』
- 参加費 無料
- 主催 特定非営利活動法人 産学連携学会
- 共催 医学系大学産学連携ネットワーク協議会 (medU-net)

#### ◆産学連携学会第13回大会を開催

産学連携学会第13回大会は、来年6月25日(木)、26日(金)の2日間、北海道北見市(会場:北見工業大学)で開催されます。多くの皆様のご参加をお待ち申し上げております。

エントリー方法をはじめ詳細は、後日会員の皆さまにご案内申し上げますとともに、学会ホームページや次号のニュースレター(2月発行予定)におきましても特集にてご案内いたします。

- 日時:平成27年6月25日(木)、26日(金) 2日間
- 会場:北見工業大学(北海道北見市公園町165番地)
- 参加登録期限:平成27年3月31日(火)

### ■ 広報委員会からのおしらせ ■

#### 【産学官連携活動写真募集】

産学連携学会では、みなさまからの産学官連携に関するお写真を募集しています。ニュースレターで、ご紹介いたします。産学官連携による人材育成や開発商品、セミナー、イベントなどの活動情報を広く発信しませんか。

ニュースレターでの掲載をご希望の方は産学連携学会事務局(j-sangaku@j-sip.org)までできるだけ高解像度のお写真とともに200字以内のキャプションを添えてご連絡ください。みなさまからのご連絡、お待ちしております。

#### 【産学連携学会のメールマガジンでの情報発信】

産学連携学会ではメールニュースを配信し、「イベントのお知らせや公募情報等、産学連携に関する情報をお伝えしています。会員の皆様への情報の配信をご希望の方は、news@j-sip.orgあるいは産学連携学会事務局(j-sangaku@j-sip.org)まで情報をお寄せください。

バックナンバー: [http://j-sip.org/mail\\_news.htm](http://j-sip.org/mail_news.htm)



#### 編集後記

本会誌の発行にあたり、ご多忙にもかかわらず多くの皆様方に原稿を執筆いただきました。ご協力に深く感謝申し上げます。

産学連携学会では活動の幅を広げ、日本の産学連携活動をより一層発展・向上させるための様々な活動を進めております。今回のニュースレターにおきましてもその活動の一端を感じていただけましたら幸いです。

編集担当一同、会員の皆様へよりよい情報を発信できるよう邁進してまいります。ご意見・ご要望をお待ちしております。今後とも、よろしく願い申し上げます。

(編集担当:北見工業大学 内島典子)



発行日 2014年11月30日

発行所 〒182-0026 東京都調布市小島町1-11-6 エンケ102  
(株)キャンパスクリエイト調布プラチナ内

特定非営利活動法人 産学連携学会 事務局

連絡先 FAX 042-490-5727 E-mail j-sangaku@j-sip.org

発行者 伊藤正実 編集主幹 伊藤正実

編集 内島典子 殿岡裕樹 馬場大輔 中武貞文 永富太一

URL <http://www.j-sip.org/>